

第六十一 火の儉約

臺所の經濟法は何人も不斷の研究を要す、研究せざれば無用の冗費のみ累なりて人は空しく金錢を浪費するのみ、主人の中川新式の火鉢とスープ鍋を客の前に出さしめ、小山君、此の火鉢は僕の新工風に成つたのだ、本式に製造させればもつと手綺麗に出来るけれども間に合せだから武力屋へ頼んで普通の鐵板で張らせた、見給へ、丁度スープ鍋が半分程スポリと箝る様になつて上の方に小さな孔がポツ／＼明いて居る、形状は先づ太鼓胴で深さが非常に深い、是は火氣を最も經濟的に使ふ様にしたので普通の火鉢だと鍋の底計り下の方から温るから火力の利き方が悪い、是れは火鉢の中へ深い鍋が半分箝つて底計りで無く腰の周圍を盡く温める様になるから火の利き方が可い、それにスポリと箝つて火氣が決して外へ散らん、鍋の底と腰を温めてから上の孔より寡しづ、上昇する計りだ、此の火鉢へは藁灰の上等を澤山入れてあるが此の灰を折々取かへなければならん、中へ用ゆる炭は極く堅い大きなのが宜い、大きな堅炭を七厘でカン／＼起して火鉢の眞中へ入れてまだ黒い部分があつたら全く火になるまで鍋をかけずに置く、悉皆火になつた處で四方より藁灰をかけてよく生け込んで置く、それから鍋をスポリと箝めるが一旦火になつた炭だから決して消えない、中の火氣は上の小孔より上昇する外寡しも散らないで鍋を四方より温め、灰をかけた火でも鍋の中はグラ／＼とよく煮立つ、斯うして置くのと晩まで其火がある子、十時間や十二時間は確に持つ子、決して／＼二度炭をつぐ必要が無い、それでスープは獨りで出来る、人の監督も何も要らん、只此火鉢を製造する時小孔の明け方が六か敷い、大く明ける程火が消えない代りに火氣を失はねばならん、あんまり小さくつて數が少いと中の火が消えて了ふ、その工合一つで火氣を經濟的に使へるのだ、是れはスープ鍋だが何を煮る時にも使ふ、火は朝一度起した切りだ幾度の料理でも出来る、是れだけの火氣を焜爐や七厘で使用したら一時間毎に炭をつがねばならん、少くとも五六倍の炭が要る子、西洋風のストーブは火氣を經濟に使へるけれども日本家屋の臺所には

不適當だし、在來の竈や七厘は非常に不經濟だし、早く此事を改良し度いものだ、全國の戸數を九百萬として一戸が一年に十圓の炭を使ふとしても一年に九千萬圓だ、假りに三分の二だけ經濟にしても六千萬圓は浮いて來る、六千萬圓の冗費が臺所から省けたら海軍擴張位何でもあるまい、戰艦の五六艘づゝは毎年製造が出来る、實際精密に勘定したら其利益は六七千萬圓に留らん、必ず一億圓以上になるだらう、今の人が儉約々と唱へるのは金錢を惜む事計り云ふが、臺所の經濟法は金錢を惜むので無い、火氣を儉約したり或は廢物を利用したりするのだ、僕の家では玉子の殻も決して捨てず、蜜柑の皮も決して捨てず、米を磨いだ白水も決して捨てず、茶殻も捨てず、大根や牛蒡の頭と尾まで萬年スープの材料にする位だから佛溜へ入る物は全くの糠計だよ」と滔々たる説明に小山も漸く納得し「僕の家でも早速此新式の火鉢を造らせやう」

第六十二 手數

臺所の經濟法は主人より聞得たり、然れども小山は尚ほ未だ不満足の點無きにあらず「中川君、お登和さんのお料理も随分結構だがあんまり手數のかゝるものが多くつてちよいと試しにくい、手數が寡しもかゝらんで輕便に美味いものを食べる工風が無いか知らん」と人の得手勝手には際限無し、中川も張合無き顔して「それならば生物計り嚙つて居るに限る、野蠻人種の様にも煮もせず焼きもせず、肉でも野菜でも生で食べるのが一番無造作だ、然しそれでも體內へ入つて消化されるまでの手數は矢つ張り同じ事だよ、體外で焼いたり煮たりしない代りに體內で胃と腹とが煮たり焼たりするだけの手數をかけて居る、世が文明に進む程體外の料理法へ手數をかけて胃と腹との手數を省いて遣るのだ、薩摩芋を食べるにしても丸嚙ぢりにすると消化の悪い纖維が其の儘腹へ入るから胃と腹とはそれを消化させるに非常の手數をかける、體外には裏漣だの擂鉢だのと云ふ便利の機械があつて造作無く纖維を除けるけれども胃と腹とは何の機械も持つて居ない、それへ手數をかけさせるのは氣の毒でないか、體外の機械は段々進歩して輕便精巧な物が出来るけれども胃と腹とは古往今來いつでも同じ道具で働いて居

る、可哀想なものさ、體外の裏漉や搦鉢で筋を取ればその手数は料理する人一人だけで済む、食べる人は幾十人あつても皆な體内の手数を免れる、その一人が手数をかけずに幾十人の體内へ其儘押込めば數十人の胃腹が盡く大手数をかけるのだ、斯んな不經濟な事は無い、或は牛肉のバラを三四時間煮通してシチユウにしても胃腹へ入つてそれだけに柔くする手数を省いて遣るのだ、牛乳だつてコップからガブ飲みにすれば手数がかゝらんで一番宜からう、その代り腹へ入つて胃液の為に凝結したり、或は外の酸類に逢て凝結するから胃と腹とが其凝結を釋いて消化させる迄に何程の手数をかけるか知れない、散々手数をかけてもよく消化し盡せないから澤山牛乳をガブ飲みにするのと下痢を起す、それを體外で寡し手数をかけて何か料理に交せて使へば胃腹はそれだけの手数を免れるでないか、何でも其通り、料理の時寡しく手数をかけると胃腸は大手数を免れる、料理の時手数をかけるのが嫌ひな人は胃と腹とに大手数をかけさせる事が好きな人だ、我が手足を憐む事を知つて胃腹を憐む事を知らない人だ、ちよこ／＼と料理を濟ませて生同様なものを腹の中へ押込むのは我が胃腹を虐待して憚らざる人だ、我邦には動物虐待廃止會が起つたけれども僕はそれよりも胃腹虐待廃止會を起し度いと思ふ、西洋人の家庭では何うして食物を美味く料理しやうと研究して居る、我邦の妻君は食物拵へをさも餘計な仕事のように蒼蟬がつて何うしたらちよこ／＼と早く副食物が出来るだらうと手数を省く工風計りして居る、自分一人が手数を省く為めに亭主や子供やお負けに自分の胃腹までが何れ程餘計な手数をかけるか更に頓着無い、實に野蠻だ子、文明の世に生まれて文明の何物たるを知らんのだ子、僕は世間の心無い人達から折々爾う云ふ苦情を聞くがア、浅ましいと思つて歎息する子、文明風の料理法は成るべく體外の手数をかけて體内の手数を省くに在りと云ふ事を忘れてはならんよ」と頻に我が料理法を辯護する、

第六十三 顔の色

中川の節は言ふべくして容易に行はるべからず、小山も尚は反對の意見を抱き「中川君、道理上より言へば其通りに違ひないが日本人の妻

君は西洋人の妻君の様に一日の仕事を料理の方へ向られない事情がある、一例を挙げれば西洋人は二週間に一度か三週間に一度の外風呂に入らない、日本婦人は體外毎日入浴して二時以上づゝも顔や手足を磨いて居る、それに日本の妻君は三日に上げず髪を結ふと云ふ手數もある、だから自然と料理のことを嫌つてお化粧の方へ手數をかけたがる、西洋人の家へ往つて見ると妻君はいつでも料理の研究かその話しをして居る、日本人の妻君は寄ると障るとヤレ丸鬚の形状が好いの、何處の髪結さんが結びました、私の髪結は下手ですから今朝結つたのをむしりこはして復た外のに結はせましたなんぞと一日に二度も髪を結つて騒いで居る人もある、是れでは何うしたつて料理の事へ心を向けられんよ」と辯護するのか悪く言ふのかイヤに笑つて我が妻を顧みる、妻君も苦笑ひして下を向くは折々二度の髪を結ぶ性と見えたり、主人の中川幾分か笑を含み「そこだテ、西洋婦人だつて身を綺麗にする心は日本婦人に劣らん、却て一層盛んな位だけれどもその方法が違ふ、西洋婦人のは内部から皮膚の色を清潔にする主義で成るべく料理へ手數をかけて榮養分の多い食物を喫して内の方から顔の色を出す、實際日本人が長く洋行して居ると色が白くなるのは多く食物の結果だ、日本婦人は外から計り磨く、お湯に入つて一時間も二時間も磨いて／＼遂には顔の皮まで摺り剥く人があるけれどもそれが為めに却へつて食物の事を度外視して粗惡な無造作な手數のかゝらない生煮の物計り食べるから顔の光澤は内部から惡るくなつて青い様な黒い様な陰氣な色になり、お負けに年を積ると顔へ汚點が出来たりソバカスが出来たりする、醫學上の説によると汚點やソバカスは榮養の不足から出来るのだ、大病の後に出来る人のあるのは其證據だ、日本婦人が外から顔を磨いて内からの食物を閉却するのは目的と結果とが反對になる、顔を磨き度いと思つたら料理法を研究して食物で色を白くするが宜い、西洋人は滅多に入浴せんけれども毎日襯衣を取かへたり、夜具布團のシーツを取かへるから垢が身につかない、日本婦人は折角磨いた身體を垢と油で黒光りになつた夜具布團へこすりつけるから一晩で垢が付く、西洋婦人は髪の代りに帽子を蒙るから帽子へ金をかけると萬事斯う違ふ、全體西洋婦人は食物の事を自分の一番大切な用事と信じて貴夫人が自ら馬車へ乗つて食料品を買ひに行く、東京市中の西洋食品屋へ往つて視ても分る、西洋人の馬車が店前に停まつて盛装した婦人が自分

でハムの片腿を下げて居る事も澤山ある、日本の貴夫人が食品屋へ入つたのは見た事が無い、貴夫人で無くとも御新造さん位の處でも買物は下女任せだ、外の品物は下女に買はせても食品計りは自分で買はないと品質に非常の相違があつて金銭に換へられん、西洋婦人と日本婦人とは平生の心掛がそれ程違ふ、料理に手数がかゝると云つて面倒がる様な人は亞弗利加の土人生活をするが宜い、お登和なんぞは牛肉でも野菜でも皆んな自分が往つて買つて来るよ」と此様子にて推す時はお登和嬢ほど家庭に徳用なる妻は無けむ、斯る人妻にする我身こそ幸福なれど座に在りし大原満が獨りニコ／＼恐悦顔、

第六十四 大至急

未婚の人が結婚後の事を想像するほど愉快なる事は無し、大原満は今こそ愉快の焼點に立てり、愉快度に過ぎて歸る事を忘れたれども小山夫婦が遅くなるとて別を告ぐるに自分獨り留まらん事なり難く、お登和嬢に心の名残を惜みつ、夜に入りて中川の家を出でたるが下宿屋へは足の進まずして兎角心は後方へ戻る「ウフ、有難いな、斯う早く事が極まらうと思はなかつた、最初の形勢では容易に中川君同胞が承知しそも無かつたけれど案じるよりは産むが安く、今では向ふの方が却て此方より熱心だ、此近所へ家を捜さう、勝手道具は此方で買はうと中川君の意氣組は大したものだ、是と云ふのも全く小山君夫婦の盡力に違ひ無い、小山君夫婦が僕の為に中川君同胞を説て其心を僕の方へ傾けしめたに違ひ無い、さも無ければ中川君は兎も角も御本人のお登和さんが中々急に此方へ心の向きそもなかつたもの、ア、持つべきものは朋友だ、小山君夫婦があればこそ僕に斯う云ふ幸福が來たけれども朋友の盡力が無ければ僕の獨力では到底お登和さんを得られない」と誠實なる人だけに朋友の情誼を感じる事深し、去りながら未だ心に一點の安からざる所あり「だが待てよ、中川君の御兩親は婚禮の為に態々出京なさると云ふから此方の兩親も郷里から呼ねばなるまい、呼ぶも呼ばないもまだ何とも今度の事を申して進げない、迂つかり申して進げて例の方から故障でも起ると大變だから事の確定した後と思つてまだ何とも申上げなかつたが、最早是れ程に確定した

上は早速申上げて御出京を乞はなければならん、何と申上げやう、別に偽りを申上げる譯にはならん、小山君と云ふ親友の御夫婦が御盡力で同じ親友の妹を貰ふ事になつた、其娘は料理もよく出来て誠に神妙な女だから何卒御許し下さつて婚禮の節には御出京を願ひ度いと斯う申して進げるより外に仕方が無い、それで御兩親が直ぐ御承諾下さるだらうか、例の一件が無ければ親友の妹を貰ふのだから悦んで御承諾下さるに違ひ無いけれどもあの方の事が心が、りだ、然しまだ公然と僕へ對して従妹を貰へと命令の下つた譯でも無し、外の人お話のあつた譯でも無い、只僕の推測に留まるのだから是れも案じるより産むが安く、向ふの方は何事も無く濟むかも知れない、何うか爾う濟ませ度もものだ、伯父様の恩になつて居るから其娘を貰へと云はれては斷りにくいけれども恩は外の道で返す方法がある、恩と婚禮とは別の事だからな、然し是が東京邊の風習だと親が息子に嫁を強み付ける事も寡いけれども郷里の風では全く親の一量見で息子の嫁を極めるのだ、當人同士の見合もさせずに親が好いと思ふと直ぐ取極めて貰つて來ると云ふ風習だからな、もしやお登和さんの事を御承諾が無かつたら何うしやう、爾うしたら僕も殆ど此世に生存する張合が無い、ア、考へて見れば御兩親の諾否が僕の運命の岐る、所、今こそ一大事の場合だ」と獨りで思案しつゝ、下宿屋へ戻るに、下女が待兼ねた様に差出す一通「大原さん、お郷里からお手紙が來て居ますよ」「爾うか」と大原手に取りて「ナニ大至急と」

第六十五 新しき家

大至急の手紙には如何なる事を言來りけむ大原は其夜終宵懊惱して寝もやらず、翌日も心の苦みに堪え難くてや起きも上らで晝過ぐるまで床の内に在り、ところへ訪ひ來れる親友の小山先づ此體を見て眉を寄せ「大原君、復た病氣か」大原「イヤ病氣では無い、寡し思案に餘る事があつて寢て居て考へた」小山「アハ、大變な考方だ、時に大原君悦び給へ、萬事好都合で、好い時には好い事のあるものさ、君も知つて居るだらう中川君の家の一軒置いた先に門構の小綺麗な家がある、その家が今朝引越しさ、中川君がそれを見て家主に聞いたところが今

日明くのでまた後の借人は極まらない、然し割安の家だから直ぐに借人が出来るだらうと云つた、中川君は君の為めに適當な家を捜して居る所だし、あの家ならば殆ど注文通りだから君の承諾不承諾は兎も角も外の人に借りられない内にと手附金を五十錢渡して君の為めに借りる事を約束して置いた、僕も今家の中を見ただけでも普請が新しくつて間取が好くつて實に申分が無い、君だつて不満足の氣支は無からうが今直ぐ僕と一所に行つて家の事を極めて來給へな」大原「ウム難有う、難有い事は實に難有くつて僕も昨日から君等の恩に感泣して居るが子、寡々此に困つた事があるテ」小山「それは知つて居るよ多分金の事だらう、新に家を持つと中々金はかゝるけれども寡し位な事は僕の方で立替へて宜し、それに中川君がお登和さんの為めに勝手道具や何かを買つて遣る積りだから君は入婿同様大手を振つて引越しが出来る、婚禮の事は延ばせても君が家だけ早く持つて置かんと中川君の両親が郷里から來た時下宿屋住居の人に嫁に遣るとも言ひにくし、君だつて何うせ家を持たねばならんから適當の家があつたのを幸ひ今日往つて見て明日にも直ぐ引越しを濟ませ給へ、お登和さんはモ一君の家の人になつた氣で先の人の荷物が出て了つたら直ぐに自分が掃除に行きますと云つて居る、勝手道具も中川君の家から不用な品を持つて行くし、持つて行かれないものは双方共通にしても宜いとお登和さんが一生懸命に世話を焼いて居る、それにしても君一人では當分の内不便だらうから雇婆さんでも置かねばなるまい、僕の知つた桂庵があるからその方へ頼んで置かうと僕が今寄つて來た、君の方は別に六か敷い支度はあるまい、机と書笈と夜具と人力車へ載せて笠の破れた洋燈を君が手に持つて書生の引越の様に車の後から尾いて來ればそれで濟むだらう、マア兎も角も一遍往つて其家を見て來給へ、今頃は定めてお登和さんが襷掛で手拭を頭髪へ被つて家の中を掃除して居るだらう、お登和さんは實に働きものだよ、君の幸福想ひ遣られる」と今度は事が先方より進歩する、大原愈よ感じた如く、「實に難有い、お登和さんがそれ程に働いて呉れる志は何ともお禮の言ひ様が無い、然し小山君、僕は實に困つた事が出來たよ、郷里から急に嫁の事を言つて來て子」小山「ナニ、嫁の事」と驚き顔、